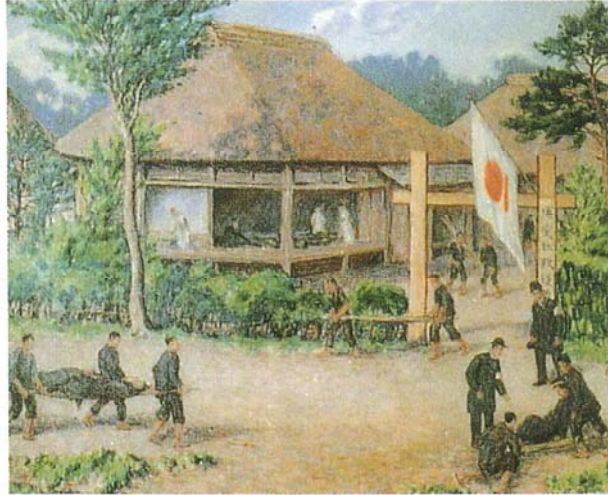


二 思いこんだらまっしぐら

世界をみつめた 日本赤十字の父

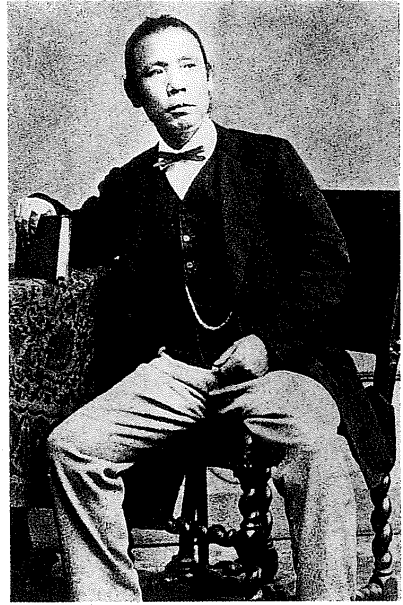
佐野常民 (一八二二—一九〇二)



西南戦争での博愛社の活動の様子(日本赤十字社所蔵)

みなさんは、赤十字のマークを見たことがあるでしょう。赤十字社は、戦争できずついた人や病氣の人を、敵、味方の区別なく助け、今では戦争だけでなく地しんや台風でこまっている人を助ける活動もしています。この考えを日本ではじめてもち、大給恒といっしょに、日本赤十字社のもととなる、博愛社をつくったのが、佐野常民です。

常民が五十六歳の時、西南戦争が起きました。日本人どうしの戦いで、常民はどうしても、きずついた人を助けたいと思いました。しかし、「味方の手当てならよいが、敵の手当てまでするとはけしからん。」それがそのころの考え方でした。常民は、恒とともに、いろいろな方法で政府にお願いをしました。しかし、どうしてもだめでした。なにごとにも、思いこんだらまっしぐらに行動する常民は戦場に直接のりこんで、ゆるしをもらいました。そして、ついに、赤十字社のもとになる「博愛社」をつくり、手当てをすることができました。こうして、日本初の赤十字活動が芽生えたのです。敵、味方の区別なく手当てをするような、博愛の心を日本に広げ、いつも先を見つめ、世界に目を向けていた日本赤十字の父、佐野常民は、それまでの人生をどのようになさって来た人なのでしょう。



45歳の常民(佐賀新聞社提供)

常民は文政五年(一八二二)、佐賀郡川副町早津江で、武士の五男として生まれました。七、八歳までは筑後川や有明海で、貝ひろいなどをして元気に育ちました。そのころ日本はオランダ、中国以外とは貿易も人の行き来もせず、約二百年も国を閉ざしていました。ところがイギリスの軍艦がとつぜん長崎に勝手に入りこみました。佐賀藩はそれを防ぐことができず、たいへんにかい思いをしました。

この事件をきっかけにして藩主となった鍋島直正は、西洋文明の吸収と、藩の立て直しに力を入れました。そのころ、常民は、親せきの藩医佐野家に養子にいき、栄壽の名をもらいました。そして、藩校弘道館では、人より何年もはやく進級するほどの才能をもっていました。藩主直正にみとめられ、研究生として、江戸、大阪、京都で、家業の医学はもちろん、あまり知られていなかった化学や物理の勉強もいっしょうけんめいにかんばりました。

江戸では、そのころ日本一といわれた蘭方医、佐賀出身の伊東玄朴の塾に学び、全国からの秀才たちをぬいて一番になりました。ところが、その塾で、日本でも数少ない大切な辞書が、なくなるといふ事件が起きました。常民はその責任で破門されました。常民は、残念でなりませんでした。常民は、暗い気持ちで江戸をあとにしたのです。しかし、それでつぶれる常民ではありませんでした。他の藩の人を、一歩も入れないというきまりをもつ佐賀藩へ、すぐれた技術者四人をまねこうと考えたのです。この考えは藩にそむくことでした。自分の身がどうなるかわかりません。でも、佐賀藩に自分ができることは何かと考え、先を読んだ

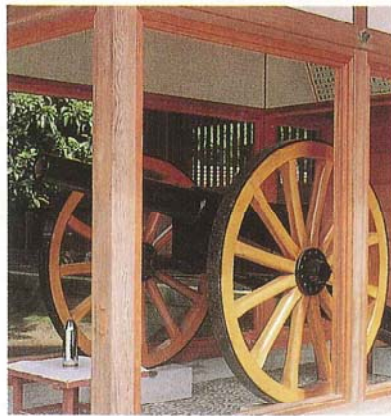
のでしよう。

その四人というのは田中儀右衛門父子、中村奇輔、石黒寛二でした。なかでも田中儀右衛門は「発明王」といわれ、京都の御用時計師であり、お金持ちで、久留米藩の武士あつかいの人で、常民よりも二十歳以上も年上だったのです。そんな人を破門の身の上で、他の藩の者を入れない佐賀へ連れて行こうというのですから、それは大変な苦勞だったのです。

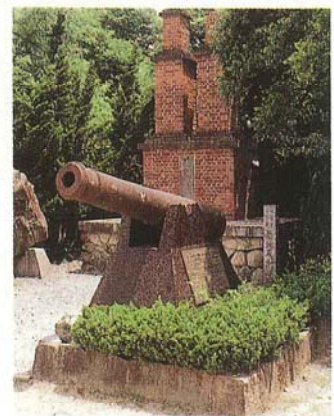
進んだ学問を取り入れ、研究を進めていくためには、どこの藩の者であれ、すぐれた人材を受け入れるべきだという、常民のおもいを、藩主直正はわかってくれました。藩というせまい考え方をしていた時代に、大きな視野に立ち日本の将来を考えていたのです。この精神は常民の一生を通して消えることなく、いつも世界的視野で人や物を見続け、西洋の進んだ文明の吸収につとめたのです。

常民がこの四人と精煉方^{※せいれんかた}についてからというものの、中村の化学技術の力、石黒の語学の力を加えて、すでに開発されていた反射炉^{※はんしやろ}にさらに研究を加え、蒸気船^{じょうきせん}、蒸気車^{じょうきしゃ}、電信機^{でんしんき}と次々につくりだし、短期間に佐賀藩の大きな力となりました。そして、今までの大砲とは比べものにならないほどの力を持つアームストロング砲^{ほう}を完成させ、常民たちの技術力は、日本で一番近代的なものとなり、日本を動かす力となったのです。

西洋文明の吸収に力を入れた藩主直正と、それを実行した常民のはたらきで、佐賀藩は江戸時代末から明



復元されたアームストロング砲(佐賀神社所蔵)



反射炉の様子(佐賀市立日新小学校)

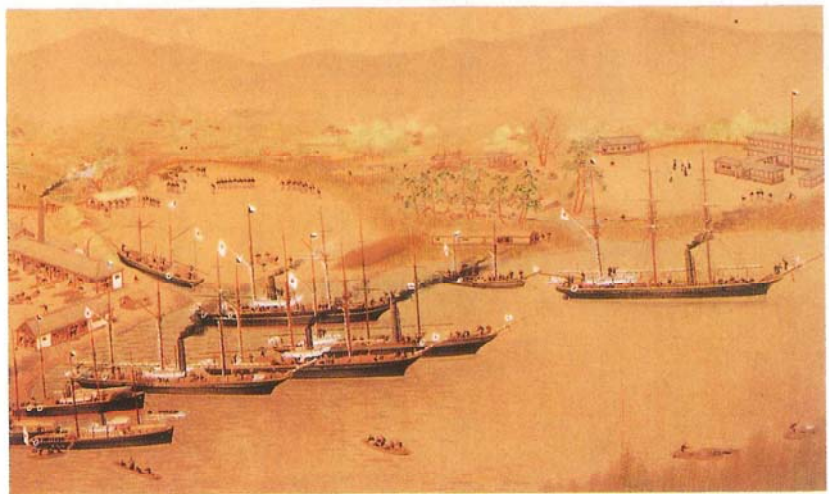
治にかけて、日本を支える、たくましい力を持った藩となったのです。

外国の蒸気船にゆらいだ日本。外国から自分の国を守るためには、進んだ学問をいち早く取り入れ、強い力を持つことが必要でした。そのことを一番に気づき、実行したのが、佐賀藩でした。

幕府ばくふによって長崎※ながさきかいぐんでんしゅうじよに長崎海軍伝習所ながさきかいぐんでんしゅうじよができた時も、佐賀から常民をはじめ、多数の人が参加さんかしました。そのころは、まだ、船を動かすなど、武士のすることではない、と考えられていました。先を見つめ、世界に目を向けた常民たちは、大切なことだと考え熱心ねっしんに取り組んだのです。この時、幕府の役人や指導しどうの外国人も、佐賀の人の優秀ゆうしゆうさに、おどろいたそうです。

その後、長崎海軍伝習所は閉じられますが、常民の申し出で、佐賀藩の三重津みえつ(今の早津江)というところで、海軍所として続けられました。三重津では、外国から買い入れた船での実際じっさいの練習が行われました。船を動かすためのいろいろな学問をするための学校、自力で蒸気船をつくりあげるための工場も備えられていました。そして、ついに、国内初、日本人だけによる蒸気船「凌風丸りようふうまる」ができたあがったのです。

この後も、船の安全のため灯台とうだいの近代化や、パリやウィーンの万国博覧会ばんこくはくらんかいの仕事もしました。文化の大切さを実感し、いつも世界を見つめていた常民だからこそ、博愛の父、日本赤十字の父となったのです。



三重津海軍所絵図((財)鍋島報效会所蔵)